

柿木克弘の「勇往邁進」

「選挙に落ちればただの人」が政治家だ。だが、「ただの人」となった政治家が再び政治の世界を目指すこともできる。昨年の参院選で次点に泣いた柿木克弘は、落選後の苦悩の日々を経て、今、再起の道を歩もうとしている。捲土重来を期して再び国政に挑む柿木に「これまでとこれから」を訊いた。(文中敬称略)

僅差に泣いた参院選後 意気消沈、苦悩の日々

48万2688票。2016年7月10日投票の参議院北海道選挙区で柿木克弘が獲得した票だ。改選数3で僅差の4位だった。3位で当選した民進党の鉢呂吉雄との票差は



柿木 克弘さん

わずか8000票余り。悪夢のような開票結果だった。それから1年。あえて同日に開催した今年7月10日の札幌後援会総会で、「もう一度チャレンジしたい」と再出馬の意志を表明した。

落選後、お礼とお詫びのため4カ月かけて全道を巡った

が、その後も落選の悪夢を忘れることができなかった。毎日一度は脳裏をよぎる。「夢にも出てくるし、意気消沈していました。毎日悶々として過ごしていたんです」お礼・お詫びを済ませていなかった利尻・礼文には今年5月に行くことができた。ひと通り挨拶回りを終えた瞬間、気持ちに変化が生じた。「もう一度やるしかない。やるだけやってみよう」と決意した。後援会での意思表示のあと、挨拶回りを再開した。

「農協・漁協・建協・商工



高橋幹夫美町市長(左)、稲津久衆議院議員(中)と柿木克弘さん(右)

予算は毎年増額し、4年目には1億円になりました。道議

になって最初に組み込んだ大きなテーマが児童虐待。私のライフワークです」

議会では自民党政策審議委員長、政調会長、幹事長を歴任。この間、道営競馬の存続、入札制度改革(最低制限価格90%への引上げ)、歯・口腔の健康づくり8020推進条例、飲酒運転防止、北海道エアシステムの経営問題、子宮頸がんワクチン被害者支援、いじめ防止条例などに取り組み、実績を積んだ。

総選挙への出馬を断念 一度は諦めた国政への道

09年の総選挙で北海道10区から出馬した自民党の飯島夕

会などを回っています。「もう一回頑張れ」と言ってくれ。温かい言葉に励まされま

す。私1人で回っていると、ごつくばらんにいろいろな話をしていたので、大変勉強になりました」

柿木克弘は1968年、美町市進徳町生まれ。美町東高校から札幌大学経営学部に進み、卒業と同時に、当時落選中だった伊達忠一前道議(現参議院議長)の秘書となった。

「衆議院議員の渡辺省一先生が遠い親戚にあたり、子供の頃から渡辺家に入り込んでいたんです。渡辺先生は貫禄があつて憧れの政治家でした。政治に興味はありましたが、大学4年生のときには企業への就職が内定してしま

した。ちょうど総選挙で渡辺先生の選挙のお手伝いをしました。道連からは「山下も渡辺も出馬を諦めた。あとは柿木だけだ」と言われました。私はその時、道連の政調会長。党の役員をやっている以上、党の方針には従わなければなりません。出馬は断念せざるを得ませんでした。稲津先生とは「一緒に登院しよう」と話していただけに残念でした」

だが、諦めたときれた渡辺は比例北海道ブロックの名簿1位に名前が載っていた。柿木は、衆院選に出馬できなくならなかった段階で国政への道は諦めていた。ところが「一票の格差裁判」を受けて16年の参院選から北海道選挙区の改選数が1つ増えて3つとなり、自民党としても2議席確保を狙って候補者を2人立てることになった。現職の長谷川岳が札幌に地盤を持つこと

から、もう1人は地方の道議から出す。白羽の矢がたったのが柿木だった。結果は冒頭で触れたように僅差で落選。そして今また、2年後の参院選に再び挑もうとしている。国政でやりたいことがあるからだ。「北海道のために仕事をしたい。農業や漁業、建設業は、地域を支える産業。大切なのは安定です。そこで働く人の人生設計を考えれば、将来が心配なのでお金は貯蓄に回して使わない。これでは地域経済が活性化せず、地方は成り立っていきません。一極集中を改め、地方分権を進め、地方に人・金・権限を移譲すべきです。幸い、参院は北海道全部が選挙区です。任期が6年と長く、じっくり政策に取り組むことができます」

座右の銘は「勇往邁進」。恐れることなく目的・目標に向かってひたすら前進することだ。49歳の柿木は「今までこれからも柿木は勇往邁進です」と決意を新たにしている。(堀武雄)